別に

浅黒い肌の色に銀のリングは、よく似合っているなと思った。
太陽の光を丁寧に反射する真っ白なポロシャツはアイロンがきちんとかかっているし、毎日綺麗に剃っている髭も、ヤニがついていない真っ白な歯も清潔感がある。あと、教科書を持つときに少し筋肉が盛り上がる感じもいいな、と思った。

ただそれだけだった。それだけで私は決めた。夜、学校の裏口で待って告白をした。
これといって場所にも時間にも深い意味はなかったし、別に本気で好きだったわけじゃない。既婚者だし、怒られるか、ばっさり振られるくらいで終わってしまうだろうな。まぁ別にいいや、それくらいの軽い感じで告白した。

でも違った。熱く指導してくれるわけでもなく、冷たい目で睨むでもなく私にヘラヘラと「早く帰れよ。」とだけしか言ってくれなかった。私よりも軽く、軽く受け止めて帰ってしまった。

だから私は家に帰らなかった。この前拝借した屋上のスペアキーをたまたま持っていたし。屋上で朝まで寝てやろう、とちょっとした反抗心だった。ペラペラのスクールバックを枕にして特に何にも見えない真っ暗な空を見て感傷的な気分になっていた。別に本気で飛び降りたかったわけじゃない。

浅黒い肌の色によく似合う銀のリングは、なくなっていた。
太陽にあたらないような暗い部屋で黒いよれよれのTシャツはアイロンがかかっていないし、伸び放題になっている髭も、ヤニがついて黄ばんだ歯も、清潔感なんて微塵も感じられない。でも、煙草を吸うときに目を細めてじっくり味わうのは嫌いじゃないな、と思った。

涙や色々なモノでぐちゃぐちゃになった私を見て、泣いてくれたから、私の告白を適当にあしらったことを許してあげることにした。

告白されたことを隠しておける時間にわざわざ告白してあげたのに罪悪感で未来を棒に振ったことも、いつもきれいにアイロンをかけていたのが奥さんだっていうのも、まだ許していないけれど。
でも、屋上で隠れて寝ている君のポッケから屋上のカギを盗んだり、授業中ずっと君を見ていたり、あまり良い生徒じゃなかったから、おあいこにしてあげようと思う。

私が手帳に入れていた君と私のツーショット写真をわざわざ拾って、自分への戒めに眺めながらアルコールの強いお酒をあおるように飲む君の横に立って、「別にここまでやらなくてもよかったよ。」と私は微笑んだ。